

ほとんどの大学では、学生自らが選んだ専攻分野にかかわる「専門科目」に加えて、語学や情報、一般教養などの「共通科目」の履修を学生に義務付けている。グローバルIT社会と呼ばれるて久しい今日の社会を担う大卒の働き手に外国語、ITリテラシーがある程度必要である点は割と納得しやすい。それに対して文学、歴史、思想、芸術、自然科学などに関する幅広い学びはどうだろうか？ 文系学生のための理系科目、理系学生のための文系科目は必

## 大学に一般教養科目は必要か

ご覧いただきたい。ここでは話をより具体的にするため、現在私が奉職している大学の社会科学系3学部（経済学部、経営学部、法学部）に引き付けて見ていきたい。彼ら・彼女らのほとんどは製造、運輸、卸売、金融などの会社員、あるいは市役所や警察などで働く公務員として就職していく。それらの職場で経済学、経営学、法学の知識が必須であることは論を俟たない。

しかしここで製造・販売されているモノの多くは科学技術の成果なしでは考えられない。また生殖技術が親子関係に関するわれわれの考えを揺さぶり、AI（人工知能）による自動運

る歌謡曲、スマホ小説や映像、あるいは至るところで目にする街看板は、これまでに積み重ねられた文学、芸術の伝統の上に立っている。昨今注目されている観光にしても、歴史や文化遺産の素養なくしては成り立たない。「人間はどう生きるか」という問いに向き合っていく思想の重要性については大塚雄太氏の本欄論文（18年9月7日付）をご覧ください。一見逆説的に見えるが、一般教養は一生ものの「実用的な」素養なのである。

とはいえ社会科学系の学生が化学記号や方程式を自在に操る必要もない。必要なのは科学技術、芸術、文学、歴史が現代社会で果たしている役割の理解に根差した、今後の社会の在り方を構想する想像力であろう。自然科学に即して言えば、科学技術史、科学技術社会論がその必要性に込められると筆者は考える。

# 「実用的な」素養として

要なのだろうか？

この問いに関する包括的な議論に関しては、隠岐さや香氏による近刊『理系と文系はなぜ分かれたのか』（星海社、2018年）を



名古屋経済大学経済学部教授  
全学教育推進センター長  
菊池 好行

転技術の急速な発展が自動車運転車の事故責任という難題を突き付けていることからわかるように、法学と科学もまた緊密な関係にある。さらに、企業コンプライアンスの中心を占める環境保全には自然科学と社会科学双方の知見が必要となる。社会科学系の学生に科学技術の最低限の素養（知識と考え方）が必要であることは明らかである。

文学、歴史、芸術などでも類似的議論が可能である。われわれが日々享受している

きくち・よしゆき 科学技術史  
日英交流史。オープン・ユニバーシティ（英国）博士課程修了。1968年生まれ。

